

稲村務著

『祖先と資源の民族誌 ——中国雲南省を中心とするハニ＝アカ族 の人類学』

めこん、2016 年、7,500 円＋税、563 頁

奈良雅史

本書は、中国雲南省を中心とするハニ＝アカ族のエスニシティおよび彼らの文化に焦点を当て、中国における近代化のあり方を論じた民族誌である。また、本書は 2015 年に東北大学環境科学研究科に提出された博士学位論文「祖先と資源の民族誌——中国雲南省を中心とするハニ＝アカ族の歴史人類学的研究」に基づくものである。本書から明らかになるのは、スコットが論じた「統治されない技法」[Scott 2009] を実践することで国家との距離を保ち、自律性を確保してきた山地民としてのハニ＝アカ族が近代化のなかでいかに「「国家を生き」ざるをえなくなった」(505 頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記す)のか、そのプロセスである。本書は、中国雲南省を中心に、タイ、ラオス、さらにハニ＝アカ族を含む雲南人の移住先である台湾をも含む複数の地域において、1987 年から 2014 年までの期間に断続的に行われた長期にわたるフィールドワークと丹念な文献調査の成果を踏まえた労作である。以下では、まず本書の内容を概観する。そのうえでいくつかのコメントを述べたい。本書は、以下の 7 章からなる。

第 1 部	祖先と資源の民族誌とは
序 章	
第 2 章	創られる「民族」
第 2 部	祖先祭祀における「民族」
第 3 章	社会構造の概要
第 4 章	祖先祭祀
第 3 部	資源の民族誌
第 5 章	表象される「文化」
第 6 章	資源化される「文化」
終 章	

本書の構成は明快である。第1部「祖先と資源の民族誌とは」で、先行研究の検討を踏まえたうえで本書全体を貫く議論の枠組みが提示され、研究対象であるハニ＝アカ族を対象化するうえでの概念設定が行われる。そのうえで第2部では、本書タイトルの「祖先」にあたる部分が論じられる。そこでは祖先祭祀を中心的な事例として、前近代の状況におけるハニ＝アカ族の文化に内在する民族を再生産するロジックについて論じられる。対照的に、「資源」に関して論じる第3部では、近代化の過程でハニ＝アカ族の文化が彼らの生活から離床し、資源化されてきたプロセスが検討される。以下で、各章の内容を簡単に要約したい。

序章では、本書がいかなる民族誌であるのか、その枠組みが提示される。本書の主題のひとつは「これまでのエスニシティ論が明らかにしたように「民族」が所与の自然な集団のラベルだとは思っていない。しかしながら、全くの社会的な構築物だというわけでもない」(15) 民族を民族誌的に記述し、分析することにあるといえる。これは民族の「原初的紐帯と構築論的状況」(16) 両方を論じることである。そのために、著者は民族誌論とエスニシティ論を検討したうえで、前者を対象化する方法として「原初論的アプローチ」、後者を対象化する方法として「用具論的アプローチ」、どちらにも対応するものとして民族集団が状況により選択されるものとみなす「状況論的アプローチ」を析出する。そのうえで、前近代の状況におけるハニ＝アカ族のエスニシティと文化に焦点を当てる第2部では「原初論的+状況論的アプローチ」、その文化への近代化による影響を扱う第3部で「用具論的+状況論的アプローチ」を採用するという本書の枠組みが提示される。

さらに著者は、民俗という概念を導入することで、伝統と近代を架橋するものとして民族の文化を位置づける。著者は民俗を「民衆の眼から見た「近代的なるもの」ではないもの」(25) とし、それを研究することで著者が「ギデンズの言う「再帰的近代」でありながらアパデュライが「拡大された近代」と呼ぶものであり、かつ複数形の「近代」(25) とする「民俗学的近代」を明らかにしようと論じる。本書の調査地域の文脈を踏まえて「中国的近代」とも呼ばれる「民俗学的近代」を明らかにすることが本書のもうひとつの主題である。

この「民俗学的近代」にアプローチするうえで、著者はさらに上記のエスニシティ論の枠組みに対応するふたつの方法論を導入する。そのひとつが歴史人類学であり、「「口承史」とでも呼ぶべきリアリティが人々に与える文化的意味を探究する」(26) ことが目指される。もうひとつが資源人類学であり、近代史的な史料に基づき、民族や民族文化というカテゴリーが国民国家との関わりにおいていかに資源化されてきたのかが焦点化される。以上の先行研究の検討を踏まえたうえで「エスニシティ論の2つのアプローチを枠組みとして用いながら、「民族」をめぐる「中国的近代」について明らかにすること」(29) が本書の目的として提示される。

第2章では、本書の主な研究対象であるハニ＝アカ族を対象化するうえでの枠組みが提示される。本章で著者は、中国、タイ、ミャンマー、ラオスにまたがって居住するハニ＝アカ族をめぐる諸カテゴリーが近現代史においていかに政治的に構築されてきたのかを、民族の下位範疇である支系との関連から詳細に検討する。そこから中国の公定少数民族と

してのハニ族とタイ、ミャンマー、ラオスにおける公定少数民族としてのアカ族に加え、これらの文化的下位集団かつ自称集団としてハニ種族、アカ種族という概念を設定する。こうした概念設定により、本書は居住地がある各々の国民国家において政治的に構築されながらも、国境を越えて存在するハニ＝アカ族を対象化すると共に、それぞれの国家における異なる近代化プロセスの文化的影響を比較可能なものとしている。

第2部「祖先祭祀における「民族」」では、上述のように原初論的＋状況論的アプローチから前近代的情况におけるハニ＝アカ族のエスニシティと文化が検討され、平等主義的な社会を構築してきた「ゾミア¹の民」(298)としてのハニ＝アカ族のあり方が祖先祭祀との関連から論じられる。

第3章「社会構造の概要」では、ハニ種族とアカ種族それぞれの社会構造が、その生態系、村落構造、リネージ体系の比較を通して説明される。中国領内の藤条江から紅河流域にそのほとんどが分布しているハニ種族は世界文化遺産にも登録された棚田を営むことを特徴とする。それに対し、中国雲南省西双版纳州からミャンマー、タイ、ラオスに分布するアカ種族は焼畑農業を特徴とする。中華人民共和国成立以前、ハニ種族が中華政体の土司の支配下にあったのに対し、アカ種族はシプソーンパンナー王国の支配下にあった。上記の生態的適応の相違は、これらの彼らを支配下に置いていた政体のあり方と関連するとされる。ハニ＝アカ族はこうした封建的で外的な統治システムと、3種の職能者（村落の頭目、鍛冶などを担う技術者、葬送儀礼などを担う司祭）からなる村落の平等主義的な自治的組織という二重の政治体系に位置づけられてきた。著者によれば、これらふたつの体系の遊離が大きかったため、前者が変わっても、後者の自律的な村落構造は維持されやすかったという。またハニ＝アカ族は、父親の名前の最後の音節を尻取り式に連ねていく父子連名制に基づく口承の系譜により維持される父系の分岐的リネージを有することを特徴とする。しかし、ハニ種族は村落儀礼においてリネージの平等を表現することで、アカ種族はリネージ単位の儀礼を行わないか、行う場合も村落単位で行うなど、村落を平等な世帯の集合とみなすことで、階層化を抑止してきたとされる。以上のように、本章では社会構造の観点から、ハニ＝アカ族がいかに国家から距離を保ち、平等主義的な社会を構築しえたのか説明される。

続く第4章「祖先祭祀」では、祖先祭祀において顕著にみられる「祖先イデオロギー」(168)に着目し、それがいかにゾミアの民としてのハニ＝アカ族を再生産してきたのか議論される。まず、ハニ＝アカ族にとっての霊的存在のカテゴリーについて、特に重要な超越的存在であるネ（精霊とも訳される）を中心に整理される。ネは「人間ではないもの」(168)として人との対照によって規定される。しかし同時に、ネには人の祖先も含まれる。例えば、上述の父子連名制の系譜において最初の数代は「ネの系譜」(171)と呼ばれる。このようにハニ＝アカ族にとっては超自然的な存在と祖先が密接な関係にあるた

1 ゾミアは「ヴェトナム中央高地からインド北東部にかけての東南アジアの5つの国々（ヴェトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ビルマ）および中国の4つの省（雲南、貴州、広西、四川の一部）にまたがる標高約300メートル以上の地域に対する新しい名称」[Scott 2009: ix]とされる。

め、「一見アニミズムに見えているものも本質的には祖先祭祀か拡大された祖先祭祀である」(168)とされる。

こうした祖先祭祀を支えるものが祖先イデオロギーである。それは葬送儀礼の際に暗誦される口承の系譜や葬歌における集合的記憶に表れる。ハニ＝アカ族の人々は、長いもので76代にもわたる系譜を口頭で伝承してきたとされる。ここで興味深いのは、前章で示されたようにハニ＝アカ族は特定リネージの卓越を抑止する政治体系を有し、さらに土司家系以外のリネージには共有財産もほとんどないため、こうした系譜の発達をリネージ体系に付随する政治経済的機能から説明しえないとの指摘である。著者によればハニ＝アカ族にとっての系譜の主な機能は祖先祭祀に関わるものである。この系譜は村落を超える政治経済的機能を持たないという意味で非国家的な祖先イデオロギーを再生産し、かつそこでは政治家や司祭になることが戒められ、中庸が勧められる。著者はそこに国家からの干渉を回避し、平等主義的な社会を構築する「統治されない技法」を見出す。祖先崇拜や中庸主義は漢族の儀礼にも見られることであるが、著者はそれを儒教イデオロギーによる文化変容とはみなさない。それは「それぞれの主体のイデオロギーを同時に満足させてしまうような見せかけのコミュニケーション」(252)であり、それこそが「統治されない技法」なのである。この見せかけのコミュニケーションは表面上の服属を示すものであり、ハニ＝アカ族の神話において外部の権力を隠喩する「龍」が取り入れられながらも排除可能な位置に置かれていることも同様の実践とみなされる。著者はこうした実践をゴッフマンによる回避儀礼の議論を踏まえ、「集团的回避儀礼」と名付ける。祖先祭祀をめぐる諸実践の分析に基づき、著者は「文化大革命以前のハニ＝アカ文化の多くは国家から逃れるために発達してきた文化」(298)であったと論じる。

しかし、改革開放以降の国家主義市場経済体制下においてハニ＝アカ族は、そうした文化を資源として活用する必要に迫られることになる。第3部「資源の民族誌」では、用具論的+状況論的アプローチから、こうした文化のあり方の変化に焦点が当てられる。

第5章「表象される「文化」」では、ハニ族の文化に関する出版物やそこでのハニ語から漢語への翻訳の問題を検討することを通して、それがいかに表象されてきたのかが明らかにされる。まず、著者が収集した2000年までに中国国内で出版されたハニ族について書かれた出版物についての分析がなされる。そこから明らかにされるのは、第一に、第2章でも検討された支系間の相違が地域間の相違として読み替えられ、公定少数民族としてのハニ族カテゴリーが強調されてきたことである。第二に、民族文化に関する表象において、観光資源などとして活用しうる特定の文化的要素が前景化される一方で、そうではない要素は排除される傾向にあることである。例えば、次章で取り上げられる世界遺産にも登録された棚田はハニ族の「棚田文化」として称揚される一方で、そこから焼畑農耕は遅れたものとして排除される。

また、ハニ語から漢語への翻訳についてハニ族知識人の出版物を事例に、ハニ語の諸概念がいかに漢語に翻訳されてきたのかが検討される。例えば、第4章でも取り上げられたネ概念は、非科学的な観点が強調される場合は亡霊や幽霊を意味する「鬼」、それが守護的役割を担う存在とされる場合は「神」と翻訳されてきた。これは翻訳を通してハニ語に

はない区分を設けることである。さらにこうした区分は「迷信」と「文化」を区分する国家の近代化イデオロギーを前提としたものであり、中国国民としての中華民族へのハニ族の統合を志向するものと分析される。ここでは「メディアや教育が作り出す漢語によるハニ族の表象世界は、ハニ語によるハニ族の世界とは別のものである。それは単に間違っているというより、ハニ語の世界とはまた別のリアリティを構成している」(346-347) という指摘がなされる。

第6章「資源化される「文化」」では、この「ハニ語とはまた別のリアリティ」がハニ族知識人や国家だけではなく、グローバルな領域とも接続し、そこでハニ族の文化が資源化される様相が描かれる。ここで中心的に取り上げられる事例は、棚田の世界遺産登録およびハニ族の薬草知識をめぐるポリティクスである。前者で著者は、ユネスコの諮問機関であるイコモスが作成した棚田に関する評価書を、ハニ族知識人たちにより提出された申請書と対照させて分析する。これは前章における翻訳の問題とも関連しており、イコモスの評価書において上述のネなどを含む霊的存在に対して大文字の God が使われている問題などが指摘される。ここではこうした評価書とハニ族知識人側の申請書との間の相違に着目し、棚田の世界遺産登録が、諸アクター（第4章で取り上げられた葬送儀礼にみられる司祭の知識の無形遺産登録を望むハニ族知識人、世界遺産登録を通して国境防衛および民族問題の安定化を図る中国政府、中国共産党のイデオロギーにおいて周縁化される土司遺跡などの歴史的建造物と自然環境の保護および世界遺産指定のアジア・アフリカへの拡大を目指すユネスコおよびイコモス）間での文化資源をめぐるポリティクスの産物として分析される。

413

ハニ族の薬草知識については、1993年に発効した生物多様性条約に基づき、各国の国内法として整備されてきた「ABS法（Access and Benefit-Sharing）」（「遺伝資源および伝統的知識に関するアクセスとその利用から生ずる利益の配分」についての法）(432)に焦点を当て、その薬草知識がいかに資源化されてきたのかが論じられる。中国国内においても同法の整備が進められているとされ、まずABS法を中心とする名古屋議定書や生物多様性条約を踏まえた中国国内の環境政策が検討される。そのうえで、そこで重視される「伝統的知識」と「先住民」との関連で、ハニ＝アカ族の薬草知識がABS法の制定によりいかなる影響を受けうるのかが論じられる。前者に関しては必ずしも体系化されていないハニ＝アカ族の薬草知識を体系化された「伝統的知識」として保護することの困難さが指摘される。後者に関して、「伝統的知識」の権利を持つ主体と想定される「先住民」にあたるのは、中国国内では「民族」である。しかし、中国の民族区域自治制度の主体は地方政府であるため、そうした知識は各少数民族の資本ではなく、国家により戦略的に活用される資源となるであろう見通しが示される。

終章では、各章の内容をまとめたうえで、中国的近代がいかなるものかが論じられる。ハニ族は「大きなリネージ集団で、中庸主義的でありかつ逃亡できる外国が周辺にあるために、比較的穏健に国民統合されたと考えることができ」(503)、そのためその伝統は急速に失われていったという。また同時に、国民国家に取り込まれることで、ハニ族の文化は国家にとっての政治的道具と化し、それをめぐるハニ族知識人と政府とのポリティクス

を通じて記号化されてきたとされる。こうしてハニ族にとってのゾミアは消滅し、彼らは「「国家を生き」ざるをえなくなった」(505)のである。最後に著者は今日の民族誌に必要なのは、本書で示されるようなグローバル化とナショナル化のなかでのポリティクスを一般民衆と知識人がいかに翻訳するか、その過程に目を向け、一見普遍的にみえる近代化を複数のナショナルな過程として示すことであると論じて本書を締めくくる。

以上が本書の概要である。本書における特筆すべき点のひとつは、原初論的+状況論的アプローチと用具論的+状況論的アプローチを用いる枠組みにより、民族のあり方およびその文化を本質化することも社会的構築物に還元することもなく、記述、分析したことにある。もうひとつの特筆すべき魅力は、ハニ族にとっての中国的近代から敷衍される「民俗学的近代」の概念を導入し、ハニ＝アカ族の文化およびエスニシティの変化から近代化の歴史的プロセスを描き出したことにあるといえる。これらの視座は、およそあらゆるマイノリティが国民国家の影響を免れえない状況にある以上、特定の民族や地域を越えた有用性を持つものであるといえる。そのため、本書はマイノリティ研究をはじめ広く参照されるものとなるだろう。

しかし、その一方で、ハニ族が国民国家に取り込まれ、彼らにとってのゾミアが消滅したと本書で示された中国的近代のあり方にはやや疑問が残る。この解釈はゾミアを国民国家成立以前に位置づけるスコットの議論 [Scott 2009] に則ったものであるといえる。しかし、本書で提示される豊かな事例からは、ハニ族が国家を生きざるをえなくなつてなお国家から自律性を保ちうる余地が開かれているようにも評者には見えた。そうした事例は本書において散見される。例えば、第6章第3節「ABS法と薬草知識」において、著者はハニ族の民族薬開発が成功しない理由を以下のように述べる。それはハニ族の薬草知識が「①口頭伝承であること②文字のある「民族」に比べて根拠を示しにくい③地方標準の知識としても設定しにくい④ハニ族の処方「単方驗方²」が多く、不利である⑤外来植物などが多く植物自体を歴史的根拠には挙げにくい⑥青藏高原から南下してくる移動の口承史を有しており、「先住」の民ではない⑦国境を跨いでいるので国家を単位とする生物多様性条約になじみにくい」(459)ためであるとされる。ここではこれらの理由からハニ族が薬草知識をうまく活用できていないことが否定的な意味合いで論じられる。しかし、上記の理由は第2部で取り上げられた口承の系譜と響き合うもののようにも思われる。上述のように口承の系譜は文字化されず、かつ儒教イデオロギーにも回収されない。それがハニ＝アカ族が階層化を抑止し、平等主義的な社会を構築するうえで重要な役割を果たしてきたとされる。だとすれば、上述のようにハニ族の薬草知識が資源化に向かいにくいことも民族薬開発の失敗要因としてだけではなく、国際機関や中国政府、ハニ族知識人との間で展開される文化資源をめぐるポリティクスに取り込まれず、自律性を保つことにつながるものとして解釈することも可能なのではないだろうか。

こうした疑問は第3部の事例においてハニ族の一般民衆のあり方が見えにくいことと関

2 単独の生薬による薬効のある処方を意味する (cf. 445-446, 453, 514)。

係している。上述のように第3部では主に国際機関や中国政府、ハニ族知識人との間で展開される文化資源をめぐるポリティクスに焦点が当てられる。しかし、こうしたポリティクスにハニ族の一般民衆がいかに関わっているのか、あるいは関わっていないのかはあまり判然としない。例えば、上述の棚田の世界遺産登録の事例では、「一般のハニ族にとってこの世界遺産指定がどういった意味を持つのかをより一般的な枠組みに置きながら考えてみたい」（400）と述べられ、その影響について論じられる。ここでは、著者が「「書割」化」（402）と呼ぶ世界遺産指定地域のみが保護の対象となり、その周辺が開発対象となっていくプロセスが提示され、興味深い議論が展開される。しかしその一方で、上述のように著者が結論において今日の民族誌に描かれる必要があるものとして挙げる一般民衆による翻訳の過程（506）はここからはみえにくい。祖先祭祀にみられる「戦わずして「勝つ」方法」（297）が提示される第2部を経た一読者としては、上記の「一般的な枠組み」に還元されないハニ族のしたたかな実践があるのではないかと勘ぐってしまうのである。

とはいえ、こうした疑問は著者が本書において豊かな民族誌的記述を行っているがゆえに生まれてくるものである。その意味で本書は国民国家成立以前を対象とするスコットのゾミアをめぐる議論の枠組み自体の再考をも促す可能性を有する優れた民族誌である。

<参考文献>

Scott, James C. 2009 *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.